

日本中國學會報 第74集 抜刷
2022年10月8日 発行

学 界 展 望 (文学)

静 永 健
東 英 寿
中 里 見 敬
井 口 千 雪
岩 崎 華 奈 子
稻 森 雅 子
秋 吉 收
孫 琳 淨

日本における儒教実践としては思想や教育のみならず、こうした礼制についても考慮すべきことは言うまでもないであろう。

山本嘉孝『詩文と経世 幕府儒臣の十八世紀』（名古屋大学出版会）は室鳩巢、新井白石、中村蘭林、柴野栗山、林鶴梁ら幕府儒臣に焦点を当て、その漢詩文と政治との結びつきにつき考察する。吾妻重二編著『「南岳百年祭」記念論文集』（関西大学出版部）は幕末から明治・大正にかけて泊園書院を主宰した漢学者藤澤南岳に関する最新の論集で、9篇の論考を取める。

近代に関するものとしては、森田康夫『太虚と公正無私の思想 近代を拓く大塩思想』（和泉書院）が大塩平八郎の陽明学とともに、三宅雪嶺・中江兆民ら近代におけるその影響についても論じている。

朝鮮に関しては、木村拓『朝鮮王朝の侯国的立場と外交』（汲古書院）が、朝鮮王朝の明清・日本・琉球との外交関係の論理とその変化について考察する。このような史的考察は朝鮮儒教の背景を理解するのに役だつてであろう。

井上厚史『愛民の朝鮮儒教』（ぺりかん社）は「愛民」思想を軸に、井上哲次郎ら日本の従来への解釈を超えて朝鮮儒教の意義を再評価する意欲作である。宮嶋博史・井上厚史らの編纂になる『原典朝鮮近代思想史』の「伝統思想と近代の黎明 朝鮮王朝」（岩波書店）も刊行された。同シリーズ全6巻のうちの第1巻で、鄭道伝・李退溪・李栗谷・宋時烈の伝統儒教、丁若鏞・朴趾源らの実学思想のほか、民乱、東学など近代思想の主要文献を邦訳し、理解と研究のための基本資料を提供している。

このほか権純哲編『完本 高橋亨 京城帝国大学講義ノート』全2巻（三人社）も刊行された。戦前、ソウルの京城帝国大学教授だった高橋亨の講義ノート60冊を整理、翻刻したもので、第1巻が「朝鮮儒学史編」、第2巻が「朝鮮思想史編」となっている。高橋亨については近年再評価の兆しがあり、その講義がこうしてまとめられたことには大きな意義があらう。（吾妻重二）

●文 学

2021年1月～12月の文学の項は九州大学所属スタッフが担当した。すなわち比較社会文化研究院教授の東英寿、言語文化研究院教授の中里見敬、同教授の秋吉收、人文科学研究院講師の井口千雪、同特任講師の孫琳浄、同助教の岩崎華奈子、同学術研究員の稲森雅子、そして全体の取りまとめを人文科学研究院教授の静永健が行った。

例年通り当該期間の単行本を中心に報告するが、紙幅の都合上、言及できなかった書籍も多い。また近年、各出版社からの冊子体新刊案内が廃され、ホームページ等の電子情報に移行しつつある。我々も極力それらを参照したが、探し当たらなかったものもある。あらかじめ読者の寛恕を乞う。

一、総記

『石川忠久先生星寿記念論文集：菊を採る東籬の下』（汲古書院）は、門下30名によ

る論文集。「中国の文学と文化」「日本の文学と文化」それぞれに分かれて丹精の論考がならぶ。巻頭に石川氏の略年譜と主要著作目録を掲げる。星寿とは、囲碁の碁盤にちなむ新しい造語だとのこと。

さてコロナ禍第2年にあたる2021年は、多くの重厚な共著書が相次いで刊行された。本欄の哲学の項目でも紹介された『東アジア文化講座』1～4（文学通信）のうち、第2巻『漢字を使った文化はどう広がっていたのか：東アジアの漢字漢文文化圏』は編者金文京を筆頭とする44名（翻訳者も含む）による共著。中国・日本・朝鮮・ベトナムにまで足を伸ばし、文字学、言語そして文体研究、そして書籍の出版と流通史にまで視野を広げる好著。また第3巻『東アジアに共有される文学世界：東アジアの文学圏』も編者小峯和明を筆頭とする42名（同じく翻訳者も含む）の共著で、国境を越えて共有される説話や物語についての最新の研究成果が紹介されている。

藤本幸夫編『書物・印刷・本屋：日中韓をめぐる本の文化史』（勉誠出版）は近世の書籍出版を中心に、書誌学と印刷技術、また書籍の流通販売等の最新研究の到達点を示した大冊。執筆者一覧には編者と校正に当たった学振研究員を含む36名が名を連ねる。

漢学文献情報処理研究会編『デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル』（好文出版）は、書名に「デジタル時代の」7字を冠するように、まさに現代の研究者および大学でこれから中国学についてレポートを書こうとする学生を対象とした好適な入門書、いや本書の冒頭に述べるように現代中国語の「工具書」として意義ある書籍である。全121項目に及ぶ盛りだくさんな内容が解説されているが、執筆は編集も兼ねる千田大介、小島浩之両氏が筆頭に僅か18名の精鋭で行われている。まさに労作。ただしこれら最先端の内容を含む共著書は、書籍としての販売を優先させるため、当然ながらインターネット上での公開が難しい。例えばCiNiiなどの検索時に、これらの共著書の各章のタイトルが、本文非公開ではあっても探し当てられるならば、今よりもっと研究者に裨益するのではなかろうか。

百科事典的な知識の豊富さと、最新の研究動向をいち早く知ることができる上記の共著書群に対し、一人の著者による書籍（つまり単著）は、起筆から刊行までに比較的長い時間が費やされるものの、研究の奥深さや愉しみを読者に十分に伝えてくれる点で、これもまた貴重である。まず複数の時代や分野を跨ぐエッセイ集として、吉川忠夫『三余統録』（法藏館）、齋藤希史『漢文ノート：文学のありかを探る』（東京大学出版会）、加藤徹『漢文で知る中国：名言が教える人生の知恵』（NHK出版）の三冊がある。また、奈良平安時代の漢文に関する本間洋一『詩人たちの歳月：漢詩エッセイ』（和泉書院）も面白い。そのほか、安藤信廣『中国文学の歴史：古代から唐宋まで』（東方書店）は、書名の印象では概説的な入門書に思われるかもしれないが、各章の項目ごとにその時代とジャンルを代表する作品が原文を付して丁寧に紹介され、かつ著書独自の視点から鑽り込んだ解釈が示されており、初心者のみならず研究者にも読み応えがある。

なお単著の中での近年の新しい傾向として、過去の名著を文庫本として再刊する動きも見逃せない。吉川幸次郎『古典について』（講談社学術文庫、解説＝小島毅）、小川環樹『宋詩選』（ちくま学芸文庫、解説＝佐藤保）、山田勝美『中国名詩鑑賞辞典』（角川

ソフィア文庫)、井波律子『史記・三国志英雄列伝：戦いでたどる勇者たちの歴史』(潮文庫、解説=佐藤卓己)、また本田濟『易学：成立と展開』(講談社学術文庫、解説=三浦國雄)、森三樹三郎『梁の武帝：仏教王朝の悲劇』(法蔵館文庫、解説=船山徹)、末木剛博『東洋の合理思想』(法蔵館文庫、解説=野矢茂樹)、宮崎市定『素朴と文明の歴史学：精選・東洋史論集』(講談社学術文庫、編集・解説=井上文則。本書のみは再刊ではなく井上氏による新編)など。そして10数年前にシリーズの単行本として出版された『中国の歴史』全12巻(講談社、2004～2005、編集委員=礪波護・尾形勇・鶴間和幸・上田信)が全巻揃って講談社学術文庫として再刊されたが、各巻それぞれに著者による加筆や補訂が施され、近10年間の学術の動向も知ることができる。これら文庫本再刊の傾向は、近年の電子書籍購買層を意識したものである。

最後にさらに共著書の一つ。高芝麻子・遠藤星希・山崎藍・田中智行・馬場昭佳『とびらをあける中国文学：日本文化の展望台』(新典社)は、学界のホープ5名による気鋭の入門書。大学でこれから中国文学について学ぼうという人々を対象に、導入として日本文化や現代社会との繋がりにも説き及ぶ。かつて同じ大学の中国文学研究室で研鑽を積んだ同学たちの、平成前半期頃までは何処の大学院にも存在していたあの談論風発の暢びやかな雰囲気は蘇ってくる。(静永 健)

二、先秦・漢

小南一郎『楚辞』(岩波文庫)が刊行された。同社の文庫本としては橋本循『訳注楚辞』(1935)以来となる。次に岩波書店に期待されるのは詩経と書経の文庫本であろうか。ただし、すでに小南氏の新訳にも顕著なように、この時期の文学作品の研究は、考古学や宗教儀礼に関する民俗学や文化人類学などさまざまな学問領域への目配りと深い考察が必要である。よって今年、この時代の学術書としてこの他に刊行されたものは、桐生真輔『古代の文身と神々の世界：横断性図像学からのアプローチ』(雄山閣)、重信あゆみ『西王母と女媧：二人の神』(ビイング・ネット・プレス)、そして松宮貴之『「入れ墨」と漢字：古代中国の思想変貌と書』(雄山閣)などいずれも文字や図像などに物証を求めたものが目を引く。

また歴史学の成果に属するが、宮宅潔『ある地方官吏の生涯：木簡が語る中国古代人の日常生活』(臨川書店)と柿沼陽平『古代中国の24時間：秦漢時代の衣食住から性愛まで』(中公新書)など、これも比べて読むと楽しい。(静永 健)

三、魏・晋・南北朝

釜谷武志『陶淵明』(明治書院)が刊行された。同社の新釈漢文大系詩人編の第1巻を飾る。なお釜谷氏は岩波書店の新刊(第3期)『岩波講座世界歴史』シリーズの第5巻『中華世界の盛衰』にも「漢魏晋の文学に見られる華と夷」を寄稿している。

狩野雄『香りの詩学：三国西晋詩の芳香表現』(知泉書館)は、今年の六朝文学研究の秀逸である。副題に三国西晋詩とあり、その考察の中心は曹丕・曹植兄弟とそれを圍繞する建安七子、また二陸・両潘にあるが、詩歌のみならず辞賦や歴史書の記述などに

も考察が及んでいる。ただ文字として文学作品を読み解くだけでなく、その行間から把握される感覚的なものについて、懸命に、そしてゆたかに理解しようとした点が評価される。昨年の刊行物であり、対象とする時代も少し異なるが、中純子『唐宋音楽文化論：詩文が織り成す音の世界』（知泉書館、2020）と併せて読むと面白い。なお北海道大学の中国語学会『饗養』第29号に書評（張江林「詩文における「香り」が持つ表現力」）が掲載された。

六朝文学研究はまだ未知の可能性を有している。関剣平『中国古代茶文化史』（思文閣出版）は、従来の陸羽『茶経』を起点とする論述を脱し、『世説新語』や『搜神記』などにも資料を求め、唐以前の研究を志す。最終章に晋の杜育「苻賦」の断片（藝文類聚82・北堂書鈔144所引）の考察に及んでおり、貴重な成果である。（静永 健）

四、唐・宋

唐・宋の文学に関連する書籍では、特に訳注の出版が目立った。

石見清裕『貞観政要全訳注』（講談社学術文庫）は、唐の呉兢撰『貞観政要』の現代日本語訳。新釈漢文大系の原田種成『貞観政要』上・下（明治書院、1978～1979）以来の全訳注である。『貞観政要』は宋版の段階で二系統の伝本があり、それは呉兢の初進本と再進本の系統を引くと考えられており、元代の戈直がそれらを校訂し一本にして今日に流伝する『貞観政要』となった。原田氏旧訳は、宋版系統の古刊本などを対照して本来の姿である『貞観政要』の本文を求め、それに基づいての訳注であるのに対して、今回の石見氏の新訳は元の戈直が校訂した、今日一般に用いられている『貞観政要』に依拠する。通行本を底本に用いたことで、読者にとってはより便利になったと言える。

唐代の詩人の訳注として、川合康三・緑川英樹・好川聡編『韓愈詩訳注』第3冊（研文出版）が刊行された。第1冊（2015）の「はじめに」において、川合氏は「文のみならず詩においても韓愈はもっと読まれるべきだ」と主張するが、なるほど本書を手にとると、そこには人間味あふれた韓愈の姿が窺え、韓愈は詩についても魅力があることが看取できる。全訳注の完成が待たれる。今回の第3冊は、銭仲聯校本の第5巻～第7巻の42首について解題、訓読、校勘、訳、注を施したものである。また齋藤茂「聯句という様式とその展開」、「韓愈年譜」および鈴木達明「関係地図」が収録されている。

同じく韓愈詩の訳注としては、盟友柳宗元との合冊で赤井益久『韓愈・柳宗元』（明治書院、新釈漢文大系詩人編8）も出版された。韓愈詩72首、柳宗元詩82首を選び、原文に訓読・現代語訳・語注を施し、各詩篇の末尾に「詩解」を付している。ここには各詩の制作年代や作成事情等、読解のためのさまざまな情報が紹介されているが、時に著者独自の見解なども示され、中唐文学を研究するに当たってのヒントも得られる。

また赤井氏は今年、唐代伝奇小説に関する論文を集成した『唐代伝奇小説の研究』（研文出版）も刊行。著者の「あとがき」によれば、第Ⅰ部は「唐代伝奇小説を取り巻く周辺の環境を論じた文章」、第Ⅱ部は「唐代伝奇が伝奇らしさを発揮するのはいつ頃でどのような演変を繰り返したのかを、前代や周辺の伝承と比較究明しようとした論考」、第Ⅲ部は「伝奇呼称の上での契機となった作、唐代伝奇小説の伝奇小説たる所以

の作品、また白眉と呼べる作品についての論考」、第IV部は「唐代伝奇小説が新たに示し得た主題にまつわる論考」、そして第V部附篇で構成される。著者が実に多彩な角度から唐代伝奇小説に取り組んでいたことがうかがえる。今後の伝奇小説研究において、まさに必読の書と言えよう。

愛甲弘志・加藤聡編『賈島研究』（汲古書院）は、唐代の賈島についての論文を掲載する「論攷篇」と賈島詩の「訳注篇」の二部構成となっている。「あとがき」によれば、本書の訳注は毎年8回程度開催された研究会「東山之會」での原稿に基づくものであり、2014年以降『中唐文学会報』に発表した「賈島詩訳注」を今回再検討して収録したという。賈島『長江集』全10巻のうちの第1巻、2巻の60首が取り上げられている。輪読会の成果が存分に発揮されており、残る8巻分を補った賈島詩全訳注の刊行が待たれる。また「論攷篇」は、東山之會が2019年12月に開催した国際シンポジウム「賈島とその文学」における日中あわせて8篇の論文を収録する。賈島をテーマに据えた学術シンポジウムは本邦初のことであり、本書の価値を大いに高めている。

劉子健著・小林義廣訳『歐陽脩：11世紀のユマニスト』（知泉書館）は、1967年に刊行されたJames T. C. Liu（劉子健）の*Ou-yang Hsiu: An Eleventh-Century Neo-Confucianist* (Stanford University Press)を訳出したものである。劉氏には、これに先んじて『歐陽修の治學與從政』（香港・新亜研究所、1963）があり、本書はその英文版のように見えるが、訳者小林氏の「解説」に拠れば、本書は単なる翻訳ではなく「中文版よりも、叙述に様々な配慮がなされた点で、一段と優れた一書となっている」と言う。また本書の特色は小林氏が新たに附した詳細な脚注にもある。劉氏の繫年考証に間違いがある場合は訂正し、引用史料の解釈に疑義がある場合は指摘し、また劉氏が省略した引用文についても丹念にその原典史料を挙げている。さらに関連する研究文献を「補注」として紹介する等、原書以上に多くの有益な情報が得られる。

田中正樹編『中国古典学の再構築』（汲古書院）は、二松学舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクトの成果報告書である。そのなかに宋代に関連する公開シンポジウム「南宋の士大夫・洪邁の学術」（2019年3月開催）の論考が収録されている。須江隆「中国史研究者から見た南宋の知識人・洪邁と『夷堅志』」は、『夷堅志』研究の現状を分析した上で『夷堅志』の全容や史料性を解明していくことが不可欠」と考えて今後の研究の方向性を示しており、伊藤晋太郎「洪邁『容齋隨筆』の三国論」においては、『容齋隨筆』における三国志観を考察し、洪邁の三国論は北宋以前の古い型に属することを明らかにし、田中正樹「洪邁学術思想初探」は『容齋隨筆』から洪邁の学術の特色をうかがい、彼の経学解釈について考察する。いみじくも洪邁についての総合的な研究論文集となっている。

歴史学の分野では、大澤正昭『妻と娘の唐宋時代：史料に語らせよう』（東方書店）が興味深い。書名の通り、妻と娘に焦点を据えた女性史、家族史研究であるが、判決文集、家訓、小説などから女性に関する史料を抽出し、女性のあり方や当時の社会情勢に切り込む。例えば第1章「女が三度も結婚するとは！：南宋の裁判記録から」や第4章「女親分もいた：南宋豪民の実態」では南宋の判決文や判決原案を集めた『名公書判

清明集』に基づいており、第2章「無能な夫を持つ妻は：『袁氏世範』の女性観」では、副題にあるように南宋の袁采『袁氏世範』を取り上げる。新たな史料から唐宋時代の女性たちの活躍を明らかにしようとした好著である。（東 英寿）

古勝隆一『中国中古の学術と社会』（法藏館）は、先秦漢代より六朝隋、そして唐初の西周政権時代までを対象とした目録学、注釈学の論考である。同時に著者は、中国においても海外で中国語によって発表した注釈学に関する論文集『漢唐注疏寫本研究』（社会科学文献出版社）を刊行している。

中村裕一『荆楚歳時記新考』（汲古書院）も目録学における重要な成果である。従来は六朝梁の宗懐撰と説明されてきた『荆楚歳時記』であるが、著者は同書を引用する『藝文類聚』等の類書の記述をもとに、それらが宗懐『荆楚記』に基づく本文と、隋の杜公瞻による『荆楚歳時記』とが併せられたものであり、特に後者は、隋による国土統一の後を承け、もはや「荆楚」地域のみならず、中原地域の風俗も記述されていることを考証している。

東英寿編『唐宋八大家の探究』（花書院）は、科研の国際シンポジウム論文集で、共著者10名。2019年の『唐宋八大家の世界』、2020年の『唐宋八大家の諸相』に続く3部作となる。今年刊行の同書巻頭には東氏が提唱する本文の虚詞（句頭の副詞、句末の助詞、そして接続詞）の計量分析が紹介されている（東英寿・宮原哲浩「唐宋八大家の文章におけるクラスター分析試論」）。（静永 健）

五、元・明・清

高橋文治『元好問とその時代』（大阪大学出版会）は、きわめて精緻な読解を通して、元好問とその時代に肉迫しようとするもので、その内容は安易な要約を峻拒する。読者は著者の読みの過程を辿り直すことによってしか、本書の到達点と随所に創見に満ちた解釈を共有したことになるだろう。著者は『烏臺筆補の研究』（汲古書院、2007）で元朝期の文章の魅力について、「ひとつは、「癖」があるゆえに難解で屈折に富み、もうひとつは、その「屈折」が元朝期の政治・社会・文化の根幹と結びついているように思えるから、ではあるまいか。つまり、「文体」が魅力的であるばかりでなく、それがモンゴル時代の本質的な部分とも繋がっている。少なくとも私にはそのように感じられたのである。」（p.330～331）と述べている。このような姿勢は本書でも貫かれている。なお稲垣裕史の書評が『中国文学報』第95冊に掲載されている。

田仲一成『中国演劇史論』（知泉書館）は、著者がかねてより主張する、農村の祭祀儀礼の一部であった演劇が世俗化し、後の都市演劇へと転化する、という祭祀起源一元論という理論的仮説を論証するもので、日本では稀に見る骨太の学術書である。『中国演劇史』（東京大学出版会、1998）の中国語訳書（云貴彬・于允訳、北京廣播学院出版社、2002；布和訳、北京大学出版社、2011）等により、氏の祭祀起源一元論が中国の学界で大きな論争・反響を呼んでいることは、序論で触れられている。氏はこれまでもフィールド調査の成果を多数公刊しているが、本書では膨大な社会・経済史的資料から演劇に関する記録を丹念に拾い集めて論じる。本書各篇の初出は、古くは1965年のもの

から最近の書き下ろしまで50年以上に亘るが、最新の研究成果やデータにより丁寧に改訂が施されており、まったく古さを感じさせない。大量の事例・データから導き出される一貫した論理の展開とその説得力は、圧倒的である。読者は祭祀起源一元論という民俗学・人類学にまたがる大きな視野を得るだけでなく、個々の史料が語る庶民生活の息吹から、さまざまな啓発を受けるであろう。

竹村則行『中国文学論纂』上・下（花書院）は、九州大学で長年にわたり後進を育成してこられた氏が「終活記念」と称して編んだ論文集である。『楊貴妃文学史研究』（研文出版、2003）刊行後に書き継がれた楊貴妃関連や白居易研究は唐代に限らず、その後の時代における伝播や受容までも扱う。日本では手薄な分野である王国維や清朝文学史の諸篇は貴重である。力作の卒業論文「王国維試論：その詩人としての憂鬱」とその主査岡村繁教授の自筆識語の影印（下巻 p.144）、また感慨を込めて自らの学究生活を振り返る「あとがき」なども自撰論集ならではと見えよう。（中里見 敬）

孫琳浄『日本近世における白話小説の受容：曲亭馬琴と『水滸伝』』（汲古書院）は、江戸の読本作家滝沢馬琴による水滸伝翻訳本『新編水滸畫傳』（初編 11冊は馬琴著、二編以降は高井蘭山著。葛飾北斎画）に用いられた底本、及び馬琴による読本『南総里見八犬伝』への『水滸伝』の影響を論じた著。第1部第1章「『水滸伝』諸版本の継承と現存」は、現存する『水滸伝』版本120種の巻頭題・系統・刊行書肆・刊行年・現存巻数・蔵書機関・請求番号・同版同本の別を整理した表が掲載されており、水滸伝研究者も必見。従来の研究において混乱が生じていた各版本の呼称を統一することも試みており、今後は孫氏の提唱する版本呼称が研究者に広く用いられんことを期待したい。また2017年、天下の孤本とされてきた中国国家図書館所蔵の石渠閣補刻本と同版の『忠義水滸伝』が日本で発見されたが（京都大学蔵）、これを馬琴の『新編水滸畫傳』の底本の一つとみなす説は新しい。

この石渠閣補刻京大文学研究科蔵本の発見は、小松謙『詳注全訳水滸伝』第1巻（汲古書院）にも活かされている。本書は翻訳書でありながら、紙幅の大部分を占めるのは注であり、語句解説に用例や依拠文献が丹念に示されていること、容與堂本・金聖嘆本の文中に記された批評が全て訳されていること（金聖嘆本の回頭総評を除く）、さらには主要版本（容與堂本と石渠閣補刻本・無窮会蔵本・遺香堂本・全伝本〔百二十回本〕・金聖嘆本）の完全な校勘作業に基づいた本文異同が、原則として全て記載され、本文改変の意図の考証までされていること、翻訳書と言うよりも文学研究書と言うべきである。周知の通り『水滸伝』版本の問題は複雑を極めており、それが作品論の進展の障害となってきたが、小松氏の労苦の賜物たるこの校記は、今後の『水滸伝』研究に多大なる恩恵をもたらすこと間違いなし。ちなみに、翻訳は中国国家図書館所蔵の容與堂本を翻訳の底本とする点、吉川幸次郎・清水茂の旧訳（岩波文庫、初版は1947～1991）と同様であるが、意識を行わず原文に忠実に、かつ原文の雰囲気損なわれぬよう工夫が凝らされており、新鮮な味わいがある。

このほか白話小説の翻訳書方面では、田中智行『新訳金瓶梅』中（鳥影社）が2018年の上巻に続いて上梓された。小野忍・千田九一による旧訳（岩波文庫、1973～1974）

なお両氏翻訳の初版は東方書局、1948～1949)の誤りが是正され、旧訳では理解困難であった諺や隠語などについても注で解説が施されており、『金瓶梅』作者の文筆をより深く堪能することができる。また、本文に登場する事物が明代にどのように流通していたか、受容されていたかという解説も旧訳より詳しい。『金瓶梅』は宋代の事柄を装いながら明代社会を諷刺する借古喻今の作とみるのが定説となりつつある昨今、この新訳と注は、明代当時の作者・読者と同一視点に立って作品を理解するための助力となろう。(井口千雪)

劉菲菲『都賀庭鐘における漢籍受容の研究：初期読本の成立』（和泉書院）は、江戸時代中期に活躍した都賀庭鐘が、中国の文献特に白話小説をどのように創作に取り入れたかを考察したものである。読本は中国白話小説に着想を得、日本の歴史物語や伝承などに融合させた翻案小説であり、庭鐘の『英草紙』『繁野話』『莠句冊』三部作はこのジャンルの嚆矢として名高い。先行研究を参照しつつ、従来不明とされてきた典拠故事を指摘し（第1部「都賀庭鐘読本の典拠研究」）、庭鐘作品の新解釈にも及ぶ（第2部「都賀庭鐘読本の新解釈」）。第3部「都賀庭鐘の読書と習作」では、庭鐘の読書筆記『過目抄』13冊（天理図書館蔵）の分析を仔細に調査し、そこに記録された書籍名を具体的に明らかにしている。そこには、類書、叢書、別集、筆記、戯曲、小説などが並び、なかでも読本との関連が濃厚な小説として『今古奇観』『初刻拍案驚奇』『金瓶梅』『禪真後史』などが見える。江戸文学の研究だけでなく、中国の通俗文学研究にも有益な情報と言えよう。なお『和漢比較文学』第68号に田中則雄の書評が掲載された。

このほか明代の多様な文化研究の成果としては、井垣清明・塩谷章子『墨海抄』（芸術新聞社）がある。明の方瑞生『墨海』の抄訳。また、中村喬『譯注『食憲鴻祕』：明代の食譜』（中國藝文研究会）は標題の通り明代の食譜の訳注であるが、清代の西洋料理についての内田慶市『『造洋飯書』の研究：解題と影印』（関西大学出版部）と併せて読むのも興味深い。そして、清末の巨人曾国藩について清水稔『曾国藩：天を畏れ勤・儉・清を全うした官僚』（山川出版社、世界史リブレット・人シリーズ71）も刊行された。(岩崎華奈子)

六、近現代

2021年は実践女学校を創設した下田歌子（1985～1936）が日本で初めて清国女子留学生を受け入れてちょうど120周年に当たるが、くしくも日本の近現代文学研究では女性研究者による出版が相次いだ。

濱田麻矢『少女中国：書かれた女学生と書く女学生の百年』（岩波書店）は、中国人女性が20世紀に主体性を獲得してゆく過程を考究した渾身の著作である。中華民国成立後の学制改革によって中国各地に女学校が設けられ、「女学生」が誕生し、近現代の中国語文化圏における文学作品の格好のモチーフとなった。本書は、知識と教養を身につけた女性たちが「人生の自己決定」権を獲得してゆく過程を「少女の冒険譚」と位置づけ、中国大陸・台湾・アメリカの作家たちを対象に、日本語、英語作品も含め、友情や恋愛のありようを多元的に読み解く。「研究者以外の方にも読んでいただけるよう全

面的に書き改めた」と述べるとおり親しみやすい筆致である。

牧野格子『謝冰心とアメリカ』（晃洋書房）は、謝冰心のアメリカ留学に焦点を絞り、新たな謝冰心像を構築しようと試みた著作。米国政府と留学先のウェルズリー大学の双方から奨学金を得、すでに著名な文学者として活動していたこと自体「1923年の中国人アメリカ留学生として独自の位置を占めていた」と指摘する。本書において最も注目されるのは、留学時代の友人瀬尾すみ江の回想及び写真、燕京大学の恩師ポイントンの日記や謝冰心から届いた書簡など、アメリカ留学にまつわる新発見の資料群であろう。

豊田周子『台湾女性文学の黎明：描かれる対象から語る主体へ 1945-1949』（関西学院大学出版会）は、「台湾女性文芸」の萌芽期にあたる日本統治期から戦後初期の「歴史の間に埋もれた」声を「文学史に位置づける」ことを目指した労作である。著者が発見した資料をはじめ、日本語作品や新聞コラム欄の中国語口語自由詩などが丁寧に校勘、分析されている。女性登場人物について、男性作家は「国家や民族などの政治的メタファーや男性の代替物として描く」傾向があるのに対し、女性作家は「人権や貧困といったテーマの当事者として描かれる」と分析し、台湾における新しい文学の揺籃期を独自の視点で捉えている。

稲森雅子『開戦前夜の日中学术交流：民国北京の大学人と日本人留学生』（九州大学出版会）も、1920年代から30年代にかけて北京の大学の研究者たちとそこに留学した倉石武四郎、吉川幸次郎、目加田誠、そして長澤規矩也らとの交流の足跡を追う。

さて、中里見敬編『中国戯単の世界：「戯単、劇場と20世紀前半の東アジア演劇」学術シンポジウム論文集』（花書院）は、2019年に九州大学で開催された戯単と劇場をテーマとしたシンポジウムの成果である。また中里見敬・松浦恆雄編『濱文庫戯単図録：中国芝居番付コレクション』（花書院）も、これに関連して濱一衛が留学中に蒐集した中国演劇資料（九州大学附属図書館所蔵）の中から、戯単186枚（重複3枚）のほか、戯票43点、映画説明書5点をデジタル・カラー写真で掲載する。関連データや索引も付され、まさに中国近代演劇研究の必携の書となった。なお本図録の画像は、現在は九州大学附属図書館HPでも公開されている。（稲森雅子）

藤井省三『村上春樹と魯迅そして中国』（早稲田大学出版部）は、村上作品に内蔵された中国を早い段階から指摘してきた藤井氏による「風」「ノルウェイ」から「騎士団長殺し」に至る各作品における最新の“謎解き”と、「中国における村上批判」（その誤謬の検証）、「村上文学の中の戦争の記憶」等の各章で構成される。村上作品と魯迅や高橋和巳との接点に関する細かな比較論は極めて興味深く、また村上が父親の従軍体験を綴った「猫を棄てる」に端を発する“戦争”への考察では、藤井氏自身の体験を語りつつ、原作者の思惟を超える透徹した議論が展開される。文学研究のあり方について改めて考えさせられる。

黄興濤『「她（かのじょ）」という字の文化史—中国語女性代名詞の誕生』（孫鹿訳、汲古書院）は、女性三人称代名詞「她」の字が劉半農の詩「教我如何不想她」（1920年作）に由来するとの“誤った”通説を細かな考証によって是正すると同時に、その一文字の創出に胡適や周作人、康白情、葉聖陶そして魯迅など数多くの五四文学者が如何に

深く関わっていたかが克明に描かれ、掛け値なしに面白い。「〈她〉という字の誕生と使用が、女性の性別意識の浸透のために、より多くの文学的・文化的空間を与えたことは疑う余地がない」(p.203)のだ。

劉岸偉が自ら筆を執った研究・エッセー集『庚子文集：比較文学をめぐる研究と回想』(白帝社)も挙げておきたい。『東洋人の悲哀：周作人と日本』(河出書房新社、1991)、『周作人伝：ある知日派文人の精神史』(ミネルヴァ書房、2011)など日本における周作人研究に大きな足跡を記す劉氏が30年来書き継いだ文章から、手づから38篇を選んでまとめた大部の著である。魯迅や周作人を始めとする中国近代文学者が、鴉外や漱石ら同時代の日本文学また日本語と如何に深く切り結んだのか、また「周作人の先蹤としての李卓吾」「日本の胡適」新渡戸稲造「黄遵憲の日本研究」等々、比較文学の沃野から語られる話題はどれも極めて示唆に富む。

やや番外編だが、萩野脩二『愚生耳語』(三恵社、TianLiangシリーズ20)は、著者がフェイスブック(ブログ)に綴った折々のエッセーをまとめて出版したもの(本書は2020年発表のものを収録)である。シリーズ名「TianLiang」は萩野氏の著作集で、第1巻『天涼』(三恵社、2001)以来、今回が何と20冊目となる。中国新時期文学や謝冰心の研究で著名な萩野氏は近年、文革時期文献を精力的に紹介され、王耀平『羅山条約：悪ガキたちが見た文化大革命』上・下(朋友書店、2017)の共同翻訳に続いて、今年も王耀平編『翠山：『五七幹部学校』小説選』(朋友書店)の監修と翻訳(これも共同翻訳)に携わっているが、ブログ上でもその蘊蓄が随所に披瀝され、また多くの研究仲間とのやり取りでもお互いの本音が垣間見られて意義深い。書籍が売れず研究者の高齢化が問題となる今、研究発信の一つのあり方を見る思いがする。

このほか陶徳民『もう一つの内藤湖南像—関西大学内藤文庫探索二十年』(関西大学出版部)、牧角悦子ほか監修『日中文化のトランスナショナルコミュニケーション：コンテンツ・メディア・歴史・社会』(ナカニシヤ出版)、許雪姬『離散と回帰：「満洲国」の台湾人の記録』(羽田朝子ほか訳、東方書店)なども上梓された。

『文学の力、語りの挑戦：中国近現代文学論集』(東方書店)は、宮尾正樹教授のお茶の水女子大学退任を記念したもので、在職34年間に巣立った受業生の論文21篇を収める。現代文学の誕生期からの各作家論、更には最新の影像作品まで時間軸に沿って力作が並ぶ。本書を通して「社会的な自己実現を望む女性」研究者たちの現況を窺い知ることができよう。付録「本書概観『空間と時間の見取図』」はお茶大中文出身研究者の層の厚さを示すとともに、中国近現代文学の多元的な広がりが見取できる。

『夜の華：中国モダニズム研究会論集』(中国文庫)は、中国モダニズム研究会の設立10周年を記念する。同会は『中国現代文化14講』(関西学院大学出版会、2014)など顕著な業績を続々と上梓する中堅と若手の研究団体だが、その研究にはそれ以前の世代が背負う政治の柵を脱した新世代の気魄が横溢している。本書でも「オナニー論」「メロドラマ」など斬新な視点が目白押しで、巻末論文「パパ、中国現代文学研究は何の役に立つの？」は、これを読む私たちそれぞれの胸に響く。

黄英哲・林初梅編『民主化に挑んだ台湾：台湾性・日本性・中国性の競合と共生』

(風媒社)は、2017年大阪大学開催の合同シンポ「台湾人が歩んだ民主化・本土化の道：台湾民主化運動の40年」を基礎とした論文集であるが、政治や歴史等の社会科学分野に加えて、文学関係でも「台湾省編訳館」「初期ロック音楽」「台湾『現代詩』」「台南郷土」等のテーマを含む。台湾文学を取り巻く状況、現代における台湾研究の地平が、多彩かつ精緻な考証によって明らかになる。

このほか佐藤公彦『胡適文選』1・2(平凡社、東洋文庫)は『胡適文選』(亜東図書館、1930)の全訳で、全著作のごく一部とは言いながら改めて日本語で彼の思想・文学を辿れることは大変有り難い。詳細な「解説」を附す。鄭万鵬『中国現代文学史』(伊藤敬一ほか訳、白帝社)は党史観を脱した驚くほどリベラルな記述で、胡適や林語堂、徐志摩、梁実秋ら並み居る反動文人も生き生きと再評価され痛快である。閻連科『心経』(飯塚容訳、河出書房新社)は、「シリアスな社会風刺と荒唐無稽な諧謔性の絶妙なバランス」(訳者「解説」)の作者が中国最大のタブーたる宗教に切り込んだ新作である。莫言『遅咲きの男』(吉田富夫訳、中央公論新社)は、2012年に中国籍作家として初めてノーベル賞を獲得して以後最初の短篇集で、思想統制強まる中国に挑み続ける。またこれまで閻連科の作品に多く取り組んできた谷川毅は新たに周大新『安魂』(河出書房新社)を翻訳した。格非の第9回茅盾文学賞受賞「江南三部曲」の第一作『桃花源の幻』(関根謙訳、アストラハウス)、第17回百花文学賞受賞作「苦雨齋」を含む『胡同旧事：葉広苓短篇小説集』(栗山千香子・大久保洋子ほか訳、中国書店)も出版された。

台湾文学では、まず呉佩珍・白水紀子・山口守編集「台湾文学ブックカフェ」シリーズ(作品社)。恋愛、結婚、LGBTなど台湾女性の日常を綴った『蝶のしるし：女性作家集』(白水紀子訳)を皮切りに、続刊『バナナの木殺し：中篇小説集』(池上貞子訳)、『プールサイド：短篇小説集』(三須祐介訳)が台湾の現代を切り取る。そのほか『鄭炯明詩集：抵抗の詩学』(澤井律之訳、集広舎)、呉明益の“ネイチャーライティング”『雨の島』(及川茜訳、河出書房出版社)など。沼野充義・藤井省三編『囚われて』(名古屋外国語大学出版会、Artes MUNDI叢書・世界文学の小宇宙2)は、王蒙と李昂の新訳作品を収める。

翻訳で最も多いのはSF(科幻)ものである。『三体』で一世を風靡した劉慈欣の『円：劉慈欣短篇集』(齊藤正高ほか訳、早川書房)、『移動迷宮：中国史SF短篇集』(上原かおり・大久保洋子ほか訳、中央公論新社)がある。やや奇抜なものとして、中国を代表する建築家のエッセー集、王澍『家をつくる』(鈴木将久ほか訳、みすず書房)なども出ている。中国現代文学翻訳会編『中国現代文学』(ひつじ書房)は、2021年で第23号を数え鋭意続刊中。

最後に、近現代文学の研究誌について触れておきたい(創刊の早い順。括弧内はいずれも2021年時点での最新号)。中国文芸研究会の『野草』(半年刊、1970年創刊、107号)、『中国文芸研究会会報』(月刊、1974年創刊、482号)、『颯風』(1972年創刊、61号)、『日本中国当代文学研究会会報』(年刊、1994年創刊、35号)、『郭沫若研究会報』(半年刊、2002年創刊、26号)、『九葉読詩会』(年刊、2004年創刊[2009-2020休刊]、6号)、『周作人研究通信』(不定期刊、2017年創刊、12号)。これらの多くは研究会等

の組織を有し、例会など活発な研究活動を継続している。またいずれの研究誌も高いレベルを担保しており、実のある成果を挙げている。(秋吉 收)

七、日本漢文・その他

まずは奈良時代。川勝守『万葉集と東アジア世界』下(汲古書院、上巻は2020)は歴史学研究の立場から『万葉集』とそこに収められた諸作品を捉え直そうとした大冊。また東原伸明など編『万葉集の散文学：新元号「令和」の間テキスト性』(武蔵野書院)は日本と中国の文学研究者のみならず、政治学や欧米社会からの視座をも組み込んだシンポジウム報告集である。また土佐朋子『校本懐風藻』(新典社)も出版された。

平安時代の漢文学においては、近年すぐれた成果が続々と刊行されている。今年には山本真由子『平安朝の序と詩歌』(塙書房)、中野方子『三稜の玻璃：平安朝文学と漢詩文・仏典の影響研究』(武蔵野書院)、宋吟『平安朝文人論』(東京大学出版会)がある。かつての漢字(真名)と仮名の文学、そして韻文(漢詩・和歌)と散文(説話・物語)との垣根はほとんど取り払われつつある。ほかに高陽『説話の東アジア：『今昔物語集』を中心に』(勉誠出版)、大竹晋『現代語訳最澄全集』全4巻(国書刊行会)が出版。なお『和漢比較文学』第68号に、山本氏と中野氏の著作についてそれぞれ書評(山本著=廖榮発、中野著=山本真由子)が掲載された。

中世の禅宗に関しては、川本慎自『中世禅宗の儒学学習と科学知識』(思文閣出版)がある。『杜詩続翠抄』の江西龍派、『三体詩幻雲抄』の月舟寿桂、そして『史記桃源抄』の桃源瑞仙など文学研究者にも有益な考察が含まれる。また末木文美士監修、榎本渉・亀山隆彦・米田真理子編『中世禅の知』(臨川書店)は、名古屋の大須観音の名で知られる真福寺宝生院所蔵の典籍調査とその成果である『中世禅籍叢刊』(12冊+別巻、2013~2019)の刊行に携わった21名の研究者による共著、中世の禅文化と、そこから広がるさまざまな知の世界を紹介している。芳澤元編『室町文化の座標軸：遣明船時代の列島と文事』(勉誠出版)も14名による共著書であるが、中国文学に関するものとして小川剛生「句題和歌と唐宋詩」、太田亨「日本中世禅林における中国文学受容について」が収録されている。

近世江戸の漢文学についてはまず揖斐高編訳『江戸漢詩選』上・下(岩波文庫)の刊行を喜ぶ。上下冊あわせて150人の320首が選録されている。また年末、同じく岩波書店より辻本雅史『江戸の学びと思想家たち』(岩波新書)も刊行された。これらによって文藝とともに思想、そして教育史の視点も加えて、江戸時代が今後さらに多くの研究者に門戸が開かれてゆくことと思う。なお揖斐氏の著作については『和漢比較文学』第68号に森達夫の「新刊紹介」が掲載されている。

ほかに山本嘉孝『詩文と経世：幕府儒臣の十八世紀』(名古屋大学出版会)、中尾健一郎・中尾友香梨編『石井鶴山先生遺稿』(公益財団法人多久の里)、前川幸雄『橋本左内の漢詩：見果てぬ夢の世界』(朋友書店)、そして頼山陽を中心とする文人結社「笑社」の著作類を影印し、現代語訳も収録した、許永晝・森田聖子・小林詔子・市川尚『笑社論集』(汲古書院)など貴重な成果が刊行された。なお昨年の出版にはなるが伊藤

善隆『初期林家林門の文学』（古典ライブラリー、2020）、谷口匡『西遊詩巻：頼山陽の九州漫遊』（法藏館、2020）もここに付記しておきたい。

磯部彰『葉の都富山の漢籍と漢学：藩校広徳館とその蔵書』（汲古書院）は、北陸の一藩校の歴史と、そこで展開された学び、そして明治後、その蔵書群がどのようなようになっていったかまでもが考証されている。中でも明治初年、いまの国会図書館の前身である東京書籍館では、和漢書の充実のために、各藩校の蔵書の中より特徴ある本が集められたことなど（p.220）、本書によって新たに知り得る事実は数多い。（静永 健）

国語教育および比較文学の分野では、堀誠『国語科教材の中の「中国」』（学文社）がある。新学習指導要領への移行を視野に入れつつ、「唐詩と道真詩」「中国小説と教材」「史伝と英傑」「文化と言語」の四方面から国語科教育教材の中の「中国」を考察する。広く日中古今の用例を列挙し、比較の視点から日本における中国の学問文化の摂取と受容を論じ、国語科教材としての漢詩・漢文・中国小説などを取り上げ、新しい読みの可能性を提示する。さらに日中共通教材における両者の伝統文化に対する教学上の立ち位置の差異にも説き及び、日中交流史に基づく詩文教材開発の重要性を喚起する。また同氏は『日中比較文学の小径』（汲古書院）も刊行。文学・文化の受容を考察の軸とし、全体を「日中比較文学」「西安見聞抄」の2部で構成する。前半は目矚、燈燐、乾鶴、蜘蛛集など身近な生物や生活習俗（俗信）をテーマに、詳細な分析を通して、日中文化習俗間の類似や共通点のもとより、その差異の源流（文化的な環境とその基層に関わる問題）にも論及する。後半は、30年来著者にとって馴染み深い古都西安にまつわる8篇の随筆。現地の寺院・文字・立像・文化施設などを介して、日中古今の虚実の世界を自在に往来する。筆致は軽妙で、その思索は思わぬ広がりを見せる。（孫 琳浄）

相田満『観相の文化史』（勉誠出版）は、かつて小川陽一『中国の肖像画文学』（研文出版、2005）によって開拓された観相学（人相術）と文学との関係が、いよいよ日本文化研究の中にも取り入れられた著作。

植物学（本草学）分野では木下武司『続和漢古典植物名精解』上・下（和泉書院）がある。2017年刊行書の続編で、著者の専門とする薬学研究の立場から、日中双方の古文献に見える植物名の異同、例えば「菅・茅／スゲ・カヤ」などの同定を詳細に考証した、まことに浩瀚な書籍である。本文1729頁。また丸山裕美子・武倩『本草和名：影印・翻刻と研究』（汲古書院）は、上記の木下著書にも参照される深根輔仁『本草和名』について、これを西尾市岩瀬文庫所蔵本を底本に校訂し、さらに日中の本草学の歴史を考察したものである。

日朝交流に関しては、田代和生編『方長老上京日史・飲冰行記』（ゆまに書房）がある。1629年に日本国王使の正使として対馬を発して漢城に至った規伯玄方の日誌と、彼らを応接した朝鮮政府の官人鄭弘溟の記録について、影印と訳注、そして詳しい解説を施したものである。特に文学研究としては、玄方の日誌に書き留められた双方の文人たちの応酬した53首の次韻詩が目を引く。また国文学研究資料館と高麗大学校グローバル日本研究院の共同編集による『東アジアにおける知の往還』（勉誠出版、アジア遊学255）は、ロバート・キャンベル、鄭炳浩ほか15名の共著である。

そのほか真下厚・遠藤耕太郎・波照間永吉編『東アジアの歌と文字』（勉誠出版、アジア遊学 254）は、アジアの少数民族の古歌と琉球の『おもろさうし』などとの対照研究を試みた9名の共著書。Edoardo Gerliniと河野貴美子の共編『古典は遺産か？：日本文学におけるテキスト遺産の利用と再創造』（勉誠出版、アジア遊学 261）は、日本伝統社会において「古典」とされるものが尊崇され、そして次の世代に遺産として伝承されてゆくことに着目した斬新な企画。共著者18名。ただし中国古典籍についての言及がやや少ない気もする。

ところで我が国伝承の数ある旧鈔本の中でも『文選集注』残巻群は、まさに天壤の孤本として名高いが、この図版を取めた『唐鈔文選集注彙存』（上海古籍出版社、初版は2000、増補第2版は2011）が今年再び第3版として再刊された。今回増補された資料は残念ながら無かったが、旧版では人為的ミスで文字が欠損していた部分（第2版の第1冊32頁の頭注「音之力反」、同728頁の右下「政」、第3冊277頁の右上「為」）が差し替えられた。またこの『文選集注』などを最初に影印した『京都帝国大学文学部景印旧鈔本叢書』（全10集線装36冊、1922～1942）の全図版も、天津古籍出版社より12冊の洋装本で出版された。もう一つ、陳才智編『白居易資料新編』（中国社会科学出版社）も刊行された。全10冊6777頁の巨編で、元頴ら白居易の同時代人から近代の錢鍾書の言説までを取め、陳友琴『白居易資料彙編』（初刊は『白居易詩評述彙編』1958）の面目を大きく一新した。新編も唐・宋・元・明・清、そして近代と中国の歴史軸で資料を配列するが、その中に円仁や島田忠臣、都良香、藤原佐世、また那波道円や市河寛齋、さらには崔致遠、李奎報など日本や朝鮮半島の著作も豊富に紹介されている。ところがなぜか菅原道真の項が見つからず、福岡で白居易を研究してきた筆者静永としては、自らの情報発信不足を深く反省するところである。

最後に、現存最古の古琴の楽譜を読み解いた山寺美紀子『国宝『碣石調幽蘭第五』の研究』（北海道大学出版会、2012）が中国語訳された。徐樑・陶熠訳『碣石調幽蘭第五之研究』（重慶出版社）。日本の優れた研究成果が、精確な翻訳によって海外の研究者に読まれることはまことに慶ばしい。（静永 健）

●語学

はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・秋谷裕幸）が担当する。

従前どおり、本稿も原則として2021年1月から12月までに日本国内で公開された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公開された成果にも言及する。

研究分野の分類および執筆者は以下の通り：「音韻」（橋本貴子・公立小松大学）、「文字・訓詁」（宮島和也・成蹊大学）、「文法・語彙（上中古）」（楊安娜・北海学園大学）、